

## 「船頭町」子どもの頃の思い出

高 司 良 恵

(会員 佐伯市宇山区)

はじめに

久方振りに船頭町をぶらりを歩いてみた。船頭町は私をはぐくんできた思い出深い町である。

浜丁・新丁・上本町・下本町・横丁・京町と商店が軒を連ね活気にみちみちていた。当時は子どもも多くほとんどの家は商家であった。

番匠川・池船橋・札場・住吉さん・剣崎・大楠・大日寺……それに四季折々のお祭や行事は、数々の夢と思いをたくさん残してくれた。歩きながら友達のこと、遊んだことなどが一こま一こま蘇り走馬燈のように、脳裏を駆け廻った。歲月は矢の如く過ぎ去り半世紀前の事になつてしまった。ちよつと不安はあるがタイムスリップ

して船頭町のあのこと、このこと、つれづれのまに思い出してシリーズ形式で書き残したい思いと、又、会員の皆様方との御縁があれば交信して語り合い教えていただければ至上の幸せと思いつつ、ペンを執ることにした。

### 出船入船 にぎわった下浜丁(その一)

大正時代から昭和十二・三年頃まで池船橋下浜丁河岸には、吹・松浦・有明・中越・西中浦・中浦の定期船、灘・木立のおろし舟がつき大変なにぎわいであった。

現在の池船橋の交差点信号機が設置されている所、船頭町寄りに西野精米所があった。そのすぐ前に十二・三段の広い石段が浜に行く通りで利用者も多かった。今でも西野さん宅はもとの位置で残っていて、とてもなつかしい思いがした。

朝早く定期船が次から次へと「町行き」といわれる買物客を運んだ。河岸の浜丁の通りには飲食店が並び、ごま出しうどん・すし・しきし万など売っていた。船から降りた買物客は、それぞれ馴染の店に一休みしては町に出て用をすませたり買物などをした。特にお盆や正月

の買物客のにぎわいはすごかった。船頭町の子ども達にとって浜丁の船つき場は船が帰ったあとが格好の遊び場だった。その中で一番おそく錨をあげるのは、木立のおろし舟の浜野のじいちゃんだった。じいちゃんの吹くホラ貝の音は浜丁中に響いた。次にじいちゃんは「いぬるぞー」と一声つけ加えた。長い棹で舟を押し出して帰って行く。やがて夕やけ雲が西空を染め始めると、美しい番匠川の夕やけである。夕暮のひととき遊びに集まった子ども達は、男女・学年を問わず走りまわって仲よく遊んだ。二組にわかれて割れた瓦を使って遊ぶ「カワラ打ち」という遊びは、とても人気がありおもしろかった。夕暮が迫り子ども達が帰ると、にぎわった浜丁の一日が終わりを告げる。

## 川名のルーツ

### ◆川中川

弥生町の川中から発し、町内川中で、井崎川に入る支流。川中とは井崎川が大きく曲流している川の中に

開けた集落の意。

### ◆久留須川

中流の中心集落を久留須という。大分県下には久留芝などと書いてクルスバという地名があちこちにあり、キリシタンのクルス（十字架）に由来しているという。十字架を立てていたところがクルス場で、この川名もそれに起源すると考えられる。江戸時代には横川（よこがわ）という。

### ◆小川川

小川というところを流れるので小川川というが、本来は小川でよかったはずだ。文字通りの小さな川である。

### ◆赤木川

赤木は流域全体の大字名。赤味をおびた材をとる木、桑の一種など意は多いが、果して何か。文字とは別の意でもありうる。（『日本全河川ルーツ大辞典』）